

# 特集 「国語の力」を考える

## 「書くこと」の重要性

「書くこと」には、実用的な文から、自分の心の表出としての言葉の記録まで幅があるようです。中学生といつ感性の鋭い時期に、どんなきっかけを与えればいいのか、どんな指導をすればいいのか、考えてみたいと思います。

### 自己を読む力としての読書感想文

「書くこと」によってのみ得られる力

信州大学教育学部助教授 藤森 裕治

#### 1 読書感想文の屈託

中学一年生の長男が音をあげた夏休みの宿題は、読書感想文であった。森鷗外の『高瀬舟』に心動かされ、これを対象作品に選んだまではよかったが、書けないという。おりしも小稿の筋を思案していた私は、読書家の彼が読書感想文の執筆に屈託している事実に関心され、その原因が知りたくなった。いろいろと尋ねてみた。

彼が言う。『高瀬舟』を読んで、僕は自殺幫助の罪で遠島刑に処せられた喜助の幸福観に関心をもった。だが、作品は庄兵衛の視点から描かれており、喜助の真意は不明である。これでは感想が生まれ得ないから書きようがないと。私が返す。書かれていないから感想が生まれ得ないとはどういうことか。感想文とは元来、読者である自分が作品をどんな気分や考えをもって読んだかということの観察記録ではないか。彼が言い返す。それなら一行で終わってしまふ。『僕は庄兵衛の立場になって、喜助の幸せとはいったい何だろうと考えるながら読み進めていました、マル』。彼の説明を端で聞いていた家内が同調する。「私も読書感想文ほどいやなものはない。あらずじと、おもしろかった。』悲しかった。』ということ以外に何を書けばいいかわからないんだもの。」

## 自己を読む力としての読書感想文

「書くこと」によってのみ得られる力

### 2 読書感想文の葛藤

家内の意見に与するのは悔しいが、読書感想文の執筆ほど、生徒の国語嫌いを助長するものはないような気がする。この作品を読んだ感想は？ときかれて直ちに出てくる答えは、おもしろかったか否か、理解できたか否かである。それを記しただけでは済まされないから、作品の概要を報告したり、やたらと改行したり、巻末の解説を剽窃したり、作者のことを調べたりして執筆枚数を稼ぐ。苦し紛れに行う作業が楽しいはずもない。それにもかかわらず、おそろしく最も広く実践されている「書くこと」の活動がこれである。

それでは読書感想文など撤廃すべきだろうか。私の友人には、この論題を肯定して憚らない方もいる。だが、読者である生徒の内言に向かう活動として、読書感想文を書かせることの意義を認めずにはいられないのが、多くの国語人だろう。読書感想を教室内の問答で引き出してはどうかという意見もあるが、読者である自分との厳しい対話は、書くことによってはかなし得ない。その際、我が息子のような生徒は、読者である自分の観察過程が言語化できず、感想たべべき答えを作品本文から発見しようとして頓挫したと解釈できよう。そのよつな自己認識もまた、読書感想文を書かせてこそその話である。

### 3 読書感想文の学力

読書感想文を書かせられるのが嫌いな生徒たちは、一方で友人の感想文を読むのは何よりも興味深いらしい。気心知れた級友が、自分とはこうも違う視点や感覚をもっていることを新鮮に感じるといふ。かつて私は、文学の読みの授業で、過去の生徒が記した文章として、当該クラスの人数分だけ異なる初発感

想文を用意して配ったことがある。それらはすべて、私がクラスの生徒一人一人の顔を思い浮かべながら、あの子ならどんな感想文を書くか想像して記したものである。生徒たちは夢中になって「先輩たちの感想文」を読み、自分のそれと比べた文章を書いた（実はこれが彼らの読書感想文になっているとは思ってもよらずに）。準備に手間のかかる実践だったが、これによって、彼らは感想文の形式と着眼点には無数のアイデアがあることを感得したように思われる。ただし、そのいずれの場合でも、「自分はいかなる読者としてこの作品にかかわっていたか」についての言及は一貫させた。なぜならこれこそが、読書感想文を書くことによって育てたい学力につながると思ったからである。

中学校国語科に求められている究極的な学力を、私は「言語による自己認識力」ととらえている。ほかならぬ自己が何を見聞きし、考え、判断し、評価しているかについて、確実に言語化できる能力のことである。この能力を育成するための関連学力として、客観的な事柄を正確に伝える能力や、他者と協力して意志決定をはかる態度がおかれていると考える。そのように考えると、読書感想文はなるほど嫌われてしかたのない活動かもしれない。なぜなら、読書感想文とは文字通りに「読書」して得た「感想」の記述ではないからだ。読者である自己がどのように心を動かしてテキストを読み進めていったかの克明精緻な観察記録と言つべきだからである。つまり、これほど直截的に中学校国語科の究極目標を穿つ活動はないのである。未熟者が気楽に愉しめる活動などではない。

我が息子は、今夜も書けない読書感想文に苦しんでいる。ひっきりなしに相談に来るが、当分の間、その苦しみに正対させておこうと考えている。